九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

北村季吟『和漢朗詠集註』考 ： その注釈態度と出版意義

村上，義明

https://doi.org/10.15017/1398460

出版情報：語文研究. 114, pp.17-27, 2012-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

北村季吟『和漢朗詠集註』考

――その注釈態度と出版意義――

村上義明

江戸前期。松永貞徳を師と仰ぎ、息子・湖春と幕府の歌学方にまで上り詰めた北村季吟。彼は歌人・俳人としては勿論、古典学者としても名高く、その手になる数多の注釈書が後世、頓に細読されてきたことは言を俟たない。その注釈態度は吉田令世が『声文私言』（文政十年刊）において、

北村季吟はをとなしき学者也、此人の著述を見るに源氏物語の湖月抄、清少納言の春曙抄、伊勢物語の拾穂抄、など皆めでたき抄物也。そは己が私の説をいはず古説どもを丁寧にかきしるしてしかも引書は皇国のはさら也。漢籍も佛書も手のとゞくたけは引出して證としたれば、極たる重宝にて、大に人の用をなし今より後いく年経たりとも廃れほろびむともおぼえず

と評したように、自説を展開するというよりは、寧ろ先行説等を引用することに特徴があり（傍線部）、今ではその引用の仕方に季吟の意図が反映されているとされる。

しかしながら、これらは『湖月抄』、『枕草子春曙抄』、『伊勢物語拾穂抄』等の注釈書を中心に述べられたものであるようで、その埒外にある彼の著作物に関しては十分に研究が積み重なっているとは言い難い。彼の注釈態度について論じるには、各注釈書をより深く分析する必要があろう。

本論は、これまで漠然としか言及されてこなかった『和漢朗詠集註』（大本・十巻十冊・寛文十一年〈一六七一〉中野小左衛門刊。以下、『集註』と表記）について分析した結果、そこに見られる季吟の注釈の特徴と、その出版意義を論じたものである。

一　『和漢朗詠集註』成立と先行研究

『和漢朗詠集』は、四条大納言藤原公任が婿養子の引き出物として撰集した、中国詩文・日本詩文・和歌の秀句を収めた詞華集で、該書はその成立から時をおかず注釈が付され、それは中世までに七つの系統に分類される。(注1)

しかしながら、これらは『和漢朗詠集』の注釈でありながら、詩文にのみ注が付されたものが一般的で、和歌についてのそれは「和漢朗詠集和談鈔（歌注）」伝本として僅かに東大本、慶大本が確認されるだけである。(注2)

『集註』はこれまで、（詩文註を中心とした）七系統の諸注釈書のうち、永済が『和漢朗詠集』詩文に注したとされる永済注系注釈書に、季吟が和哥註を添えて成立したと認識されてきたが、これは『集註』の実体を捉えたものではなく、その序文や内題下の記述等に牽引され、詳細に分析されることがなかったことを示している。

以下に『集註』序文の一部を挙げ、その成立のあらましを見る。

①屬者中野氏某閲レ市而捜二獲永濟之註一示レ予、不二喜而嘉一乎。②其爲レ註祖二述覺明之註一而以二和語一解レ之。〈中略〉惜哉、猶③闕二和歌之註解一、豈非二白圭之玷一也乎。④予少時聞二此集之詩章於尺五堂一。至二和歌之秘訣一則請二問逍遊軒一。予於二此集一其所レ從舊矣。今幸見二永濟註一之日、芟二其繁一輯二其餘一、⑤附以二嚮所レ聞之和歌之訓説一、該爲二一編一、亡慮十巻號曰二和漢朗詠集註一。嗟夫至二朗詠之音響曲折一、我所レ不二與知一也。啻述二前脩之訓説一、而明二此集之大義一而已。恐レ不レ合二大人意一也。我黨之小子含二毫朗詠歌林一者有レ所レ資歟。於レ是乎書(注3)

これによれば『集註』は、傍線①中野氏某（『集註』刊行に携わった書肆・中野小左衛門、または周辺の人物か）によって「永済之註」が示され、それは②「覺明之註」（その成立から中世を通して最も流布した私注系）を和語で解したもの（詩文註は漢字カナ交じり文）で、③和歌に註は付されていなく、④季吟はかつて逍遊軒（松永貞徳）より学び、⑤和歌の訓説をもって注を付し（和哥註は漢字かな交じり文）、刊行したものであると分かる。

さらに『集註』内題下に「詩文註　永濟／和哥註　季吟」とある。こうしたことから本書が永済の詩文註に季吟が和哥註を付しただけの注釈書という認識がなされてきた。具体例を挙げるなら、『日本歌謡集成』（春秋社 昭和3年）巻三「中古篇」の高野辰之氏の「解説」に、

詩文の註ははやく西生永濟の手に成つたが、和歌の部が缺けてゐたので、北村季吟が之を補足して一部完きものとしたのである

とあり、その他『集註』への言の多くは大同小異これに準ずる。しかし、以上の見解より一歩進められたものも見られる。堀内秀晃氏は『日本古典文学大辞典』（岩波書店　昭和60年）「和漢朗詠集註」項に、

永済の注は片仮名交りの楷書体で、季吟が筆削を加えて簡明に出典・解釈・典拠・作者略伝等を記す。季吟の和歌注は平仮名交りの行書体で、出典・詞書・詠作事情・先人の説・異文・作者解説等を記す。

と記され、さらに黒田彰氏は『和歌大辞典』（明治書院　昭和61年）「和漢朗詠集註」項目に、

近世を代表する和漢朗詠集の注釈書で、鎌倉中期以前成立の永済注〈中略〉に基づき、季吟が歌注を加えたもの。〈中略〉季吟は、私注そのほかを用いて、永済注にかなり手を加えているので、本書を直ちに永済注と見なすことには問題があり、永青文庫蔵の永済注などに就くことが望ましい。

と述べられた。これらの見解は、『集註』に対するそれまでのものよりも前進した様相を呈す。しかしどの程度の改変がなされているのか、またそれが何を意図したものであるのか等には触れられていない。

次節より注釈の成立が異なる『集註』の詩文註と和哥註に分けて考察する。

二　詩文註

先述のように『集註』詩文註は、永済注系の『和漢朗詠集』注釈書に季吟が改変を加えたものである。ここではその改変が如何なるものであったのかを述べる。

比較の対象とするのは主として永青文庫本『倭漢朗詠抄注』（引用には注2の資料を用いた。以下、「永済注」[注4]と表記）である。その理由は、零本の多い永済注系諸本のうちで完本であることと、幽斎の奥書が備わることから、該書が季吟と近い文化圏にあった可能性が高いことによる。

『集註』収載詩文註全594項目（詩文＋注釈文で一項目）全てを比較した結果、季吟が行った各項目への改変を以下のように大きくA、Bに分類した（この他、永済注諸本に収載されない詩文への注釈も数例確認されるが、これは季吟による改変にあたらないため、今はおく）。

A　一部改変（1 修正・2 追加・3 削除）

B　全文改変

まず「**A　一部改変**」は、文字通り永済注の詩文注に対して季吟が部分的に改変したものであり、その規模には大小がある。これは注釈文全体を改めたものではないので「**一部改変**」とした。さらに小分類として「**1　修正**」、「**2　追加**」、「**3　削除**」の三つに分けられる（これらの小分類は、同一項目の中に重複して見られる場合が多い）。

これより適宜注釈文を引用してその具体例を記す。比較表の上段には永済注の注釈文を、下段には『集註』のそれを挙げる。

はじめに「**1　修正**」について。これは詩文の解釈、語釈および出典等について季吟が修正したものを指す。「朝蹈二落花一相伴出暮　随二飛鳥一一時帰」詩文註を例に説明する。

〈朝蹈二落花一相伴出暮　随二飛鳥一一時帰〉（『集註』巻第二「落花」）

永済注

〈詩題〉

白

〈注釈〉

此詩、文集六十六ニアリ。注、惜残春トアリ。上句、相伴出トハ、遊戯ノ友ニ相伴テ、ヤトヲ出ル意也。

『集註』〈季吟注〉

春来頻與二李二賓客一郭外同遊因贈二長句一　白

此詩文集三十三ニアリ。上ノ句相伴出トハ、題ニシルス李二賓客ト相伴テヤドヲ出ル心ナリ。

先に〈注釈〉を見比べて欲しい。永済注にはこの詩文が「文集六十六」にあるとされ、それを季吟が「文集三十三」と修正している。

『集註』に収載される詩文のうち、白居易の作とされる詩文は141例あり、このうち右例のように『白氏文集』収載巻数が修正されるものは多数確認される。このうち季吟が当時流布していた明暦三年（一六五七）に京都の書肆・林和泉掾により板行された和刻本『白氏長慶集』（または後印本）によって巻数などを修正したと思しい例は67例に及ぶ（永済注はおおむね古態をとどめる『白氏文集』の巻数によっている）。

このように季吟が当時流布していた資料を用いて修正したことにより、出典巻数のみならず注釈文が改められた例がある。右に挙げた詩文註の引用の〈詩題〉（詩文末に割書されるもの）を見ると、永済注には「白」と記されるのみであるが、『集註』には「春來頻與二李二賓客一郭外同遊因贈二長句一　白」とあり、これは先に示した和刻本『白氏長慶集』巻第三十三に共通する。そしてこの〈詩題〉が付されたことにより、〈注釈〉の注釈文「上ノ句」以下の注が、より詩文に即した形で修正されたことが伺われる。

ここでは『白氏文集』に関わる注釈文について示したが、この他にも詩文の解釈、語釈および出典を修正した例は多数

確認できる。

「1　修正」についてもう一点紹介する。それは永済注にて「難儀」、「秘蔵」とされた箇所を『集註』で示さなかったもので、二例存する。

〔有レ時當レ戸危レ身立無レ意故園任レ脚行〕（『集註』巻第二「端午」）

永済注

下句ハ、ムカシヨリノ難儀歟。①無意トハ、非情ナレハ云也。故園ニ任脚行トハ、園ノウチニ、オヒツラナルヨモキノ、風ニフカレテ、一方ヘナヒキテユクカ、人ノハシリユクニ似タル也。②或義云、五月五日ニ、人ノ、ヨモキヲソテニカケテ、故園ニアリクヲ、艾人ノアリクニスル也。艾人ハ無意、タヽ、人ノアシニマカセテ行ト云也云々。〈中略〉尤可秘蔵也。

『集註』（季吟注）

下ノ句无レ意トハ、艾人ノ形ハ人ナレドモ、何意モナク、風ナドニ吹チラサレテ、園生ナドヲマロビユクヲ、故園任レ脚行トハ云ナリ。

永済注においては、当詩文の下句の解釈は「ムカシヨリノ難儀歟」とされ、①と②の解釈を記した上で「尤可秘蔵也」と締めくくる。これに対して季吟は永済注の①と②の注釈文とは異なる、より平易な注に修正しており、「難儀」や「秘蔵」については触れていない。紙幅の都合上挙げないが、もう一例は巻第二「蟬」にある詩文に、永済注にて「未勘得」と記述される部分に対して同様の手法で注を付したものである。

以上見てきた季吟による**「1　修正」**は、当時流布していた文献に即して注釈を改変し、さらに秘説に関わるような複雑な説を挙げていない。これは読者（『和漢朗詠集』は初学書としても重宝されていた）の便宜を図ってのことだろう。

次に**「2　追加」**であるが、これは永済注にない注釈文を加えた改変になる。これには注の対象となる詩文と同じ詩文の収載される書の指摘、語釈、解釈および作者情報の追加等がある。

このうち同詩文の収載される書の指摘には、たとえば先に示した「有レ時當レ戸危レ身立無レ意故園任レ脚行」詩文註冒頭に、

此詩菅家文草ノ四ニアリ。是讃州任國ニテノ御作ナリ

と季吟による注釈文の追加があり、これらの注を含む。このほか永済注に見られない注釈文の追加全般がこれにあたる。

また注釈文の追加について、季吟が重視したと思われるものに作者情報の追加がある。この作者情報とは、例えば「池凍東頭風度解窓梅北面雪封寒（『集註』巻第一「立春」）」という篤茂の詩文についての註釈文で、

作者篤茂ハ大内記藤原繁茂ガ男ナリ

とあるような一連の注釈文を指す。これは基本的に『和漢朗詠集』テキスト中において初出の作者の場合にのみ追加されるもので、詩文註には他に42名（他にここでいう作者情報の形式にあたらないものもあるが、それはカウントしていない）の作者情報が確認される。これは後述する和哥註にも同様に見られる。

最後は**「3　削除」**である。これは「2　追加」とは逆に、永済注にあって『集註』にない注釈文を指す。つまり季吟が削除したものになる。「清唳數聲松下鶴寒光一點竹間燈（『集註』巻第五「鶴」）」詩文註を例に示す。この注釈について永済注には、

サムシトハ、スサマシキナリ。有説ニハ、実ノトモシヒニハアラス。竹ノ葉ニヲケル、ツユノヒカリノ、灯ニニタレハ、カクイフ也トモイヘリ。

とあり、これは『集註』には見られない。

ここまで**「A　一部改変」**を見てきた。これにあたる例は詩文註全594項目のうち**「1　修正」**442例、**「2　追加」**387例、**「3　削除」**320例が確認される。

次は**「B　全文改変」**を示す。

〔夜鶴眠驚松月　苦　暁鼯飛落峽烟寒〕（『集註』巻第六「山」）

永済注

此詩ハ、時ノ景気ヲ作レルナルヘシ。上句、夜鶴眠驚トハ、ヨノフケタル心歟。松月苦トハ、松ヲ照ス月ノカケノ、モノサヒシキナリ。下句、暁鼯トハ、ムサ、ヒハ、コノ木ヨリ、カノ木ニトヒウツルニ、ノホルサマニハ、トフコトアタハス、クタリサマニノミ、トフナリ。飛落トハ此心ニヤ。峽トハ、ヤマノカヒナリ。

『集註』（季吟注）

此詩松月苦ヲサヤカナラントヨム点ハ、暮烟ニ望テ夜月ノ松ヲ照ス時節ヲ思ヒヤレルナリ。苦メリトヨム時ハ、只松月ノ物サビシク心グルシキ心マデナリ。此点優ナルニヤ。下句、暁鼯トハ、アカツキノムサ、ヒナリ。世俗ニ野衾ト云モノナリ。峽烟ハ山ノカヒニ雲霧ナドノタナビク也。寒モサムカラント暁ノ氣色ヲ思ヒヤル点アリ。所好ニシタガフベシトソ。

一見すればわかるように、永済注と『集註』の注釈文は異なる。このことから季吟が全文を改変したとわかる。『集註』注釈文末にて傍線部**「所好ニシタガフベシトソ」**とあるのは、先行の説に対して別の見解を示す際の言い回しで、このことからも**「全文改変」**が季吟の為したものであるとわかる。

この**「B　全文改変」**は、詩文註においては30例確認できる。

以上、**「A　一部改変（1　修正・2　追加・3　削除）」**、**「B**

全文改変」が、『集註』における季吟の永済注受容態度の一端である。このような季吟による改変は詩文註殆どになされ、もはや「詩文註＝永済」とは言い切れないことがわかる。

これにより内題下に「詩文註　永濟」と記しておきながら、実は季吟による多分の改変がなされていることが判明したのである。

三　和哥註

先述したように『和漢朗詠集』和哥註は詩文註とは異なり、その注釈史において少数派であった。このような背景にあって季吟は『集註』に和哥註を付し、初の完全な形の『和漢朗詠集』注釈書の刊本を世に送り出した。ではその和哥註の注釈方法はいかなるものであったか。

和哥註は詩文註と成立が異なり、永済注のように『集註』と比較すべき対象が無い。しかしながら『和漢朗詠集』に収載される個々の和歌にはそれぞれ歌集や歌学書において言及されてきたものを含むため、それらをどのように引用してきたか、またはそれ以外に季吟による注釈がどの程度行われているのかといった観点から考えることはできる。

まずは和哥註の基本的な形式を「秋風にはつかりかねぞきこゆなるたが玉づさをかけてきつらん（『集註』巻第四「鴈付歸鴈」）」歌より挙げる。

古今集に是貞のみこの家のうた合の哥とあり。新撰万葉には、あき風に鳴かりがねと有。栄雅云、はつかりの空にきこふるは誰言傳の玉づさをかけてきつらんと也。鴈がねの玉づさといふは蘇武が胡国にとらはれし時、鴈がねの足に文をつけて古郷にことつてたる事のある也。伊勢物語に秋風ふくとかりにつげこせといふも、炎風ひや、かに吹ころ鴈のくれば也。〈中略〉宗祇云、此うた初といふ字肝心なり。誠に新に聞うへにて此心はまうけたる物也。季云、此蘇武が鴈書の事、漢書を勘ふるに、実に蘇武が鴈に書をつけたるにはあらず。常恵がはかりことに、漢のつかひにいはせたる事なり。蘇武、匈奴と戦まけて終にとらはれたりしに、常恵もともにとらはれて胡地にありし。扨十九年の後、漢の使者、胡地にきたりて、蘇武が事を問ければ、匈奴偽て、蘇武は死たりと答けるに、常恵、漢の使者に教ていはせしやう、漢の天子上林にて鴈を射給ひけるに、其鴈の足にまさしく蘇武が帛書ありし。いかでか蘇武は死なんといへといひければ、漢の使者其ごとくに匈奴にいひてせめければ、匈奴おどろき謝して、まことは蘇武は死ざるとて蘇武をいだ

してかへしたる事也。〈中略〉委可二勘見一

傍線部で示した注釈文冒頭には、概ね該当和歌を収載する歌集や物語などが指摘される。ここでは『古今和歌集』および『新撰万葉集』がそれにあたる。それ以降はその注釈書や、その和歌に言及する歌学書等の記事が適宜引用される。当注にては『古今栄雅抄』が「宗祇云」の前まで引用される。それに続く「宗祇云」は『十口抄』の記事と共通する。

以上のように当和哥註には二つの先行説が記されるが、他の和哥註の例ではここにより多くの先行説が引用されることもあり、これらの点は『湖月抄』、『伊勢物語拾穂抄』といった注釈書に見られる季吟の注釈態度、すなわち吉田令世が述べたような姿勢に共通する。なおこの箇所には逐一それぞれの注釈書の書名または著者名を記し、できるだけ読者が出典にあたることが可能であるように配慮したさまが見て取れる。

注目すべきはその後の「季云」と続く記述で、これは季吟自身が付した注釈文である。はじめに引用される『古今栄雅抄』には、匈奴に囚われた蘇武が鴈の足に文をつけて自分のことを故郷に知らせた、とあるが、季吟はそれを『漢書』「李廣蘇健傳」の記事を確認した上で、鴈の足に文をつけたのが蘇武ではなく、そのような虚言をもって蘇武が死んだと言い張る匈奴を欺いた旨が記される。ここには先行の説に盲従せず、きちんと出典を確認した上で注釈を著わす季吟の姿勢を垣間見ることができる。これについて右の例では注釈文中に「季云」とはっきり示されていたが、たとえ「季云」と明示されていなくとも、季吟が先行注釈書の引用によらない注を付していると思われる箇所が程度の大小合わせて『集註』収載和歌全219首のうち182首と多く和哥註に確認される。

季吟の、引用によらない注釈態度についてもう一つ紹介する。それは先に詩文註にて示した、作者情報を付した点であり、これは和哥註にて62名に付される。そしてそれは、例えば「年のうちに春はきにけりひと丶せをこそとやいはんことしとやいはん」という元方歌についてその和哥註末に、

元方は、棟梁の子、業平の孫、此道の賞翫につきて、業平の孫を古今の巻頭にいれられたるなり

とあるように、作者情報の場所および内容に、詩文註にて追加されたそれと共通することがわかる。

さらに詩文註との共通点でいえば、先に季吟が「秘説」を示さない姿勢であると述べたが、これも和哥註にあてはまる。『和漢朗詠集』は秀句撰であるため、他書に同歌が収められる例は多く、「世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし（『集註』巻第二「花付落花」）」歌について『集註』和哥註には、

伊勢物語の哥也。古今集にも渚の院にてさくらを見てよめると詞書あり。河内国交野にて惟高のみこ狩し給へる御供につかうまつりて、かのなりひらのよみ給へる歌也。牡丹花云、待時も心をつくし。ちる時も心をまどはす物なれば。中〳〵絶てさかずは春の心はのどかなるべしとよめり。長閑、遅皆しづか成事也。此哥土佐日記にはたえてさくらのさかざらばとあり。業平は平城天皇の御孫阿保親王の御子也。

と、上から順に『伊勢物語』、『古今和歌集』、『土佐日記』にも収録されていることが指摘される。この三書は、それぞれ季吟による注釈書があり、このうち刊本は『伊勢物語拾穂抄』(注5)、『八代集抄』、『土佐日記抄』である。これらの注釈文にはどのように注が付されているか。

『伊勢物語拾穂抄』

肖心は、只、花に着したる儀也。春来てはいつかはと待、さけば心をつくし、うつろへば雨風を恨み、散果ぬれば名残を思ふ心あれは、春の心終にのとかならぬにより、絶てなくは長閑ならんと也。玄同。師義 真名伊勢物語には不レ絶桜とあり。其故にこりてよみて、もとより桜のなかりせばと云儀など云説あり。当流不レ用。有二口訣一。

『八代集抄』

此歌断と不断との二つの心有。断の心は、中〳〵なくはよからんといふ。不断は、本来なくはの心也。不断の心は、花をおもふ心猶まされるにや。伊勢物語有常哥ちれはこそいと、桜はめてたけれうき世に何か久しかるべきありて世の中はてのうければなと返しのやうによめれは、業平、桜のちるを執着したれはとみえたり。**口訣**

『土佐日記抄』

此世の中に、とよめるうたいせ物語、古今集にはたえて桜のなかりせはとあり。此うたの心、玄旨法印云、全篇花に執心のうた也。先春になれは、花はいつかさかんと待心あり。はやさきぬれは、そゝろにあくかれて、いつくの花にもと思へり。やゝうつろへは風雨に心をいたましめ、散はつれは名残をしたふ。これみなさくらのあるゆへ也。世上に桜の絶えてなくは春の心は長閑ならんといへり。

『伊勢物語拾穂抄』および『八代集抄』には、季吟による「口訣」の文字が記されるが、翻って『土佐日記抄』にそれはなく、この点は『集註』と共通する。これは伝統的に『伊勢物語』や『古今和歌集』が秘伝とされるべき内容を有する歌書であり、『和漢朗詠集』および『土佐日記』にはそれが意識されないものであったことに由来するのだろう。

以上の点が『集註』和哥註の特徴であり、まとめると、①季吟の引用によらない注釈が多く、②作者情報が付され、③口訣には触れない、といったものに概ね分類でき、これは詩文註にて季吟が行った注釈態度と共通する。

詩文註は季吟により多くの改変がなされ、和哥註には先行の説の引用に終始しない積極的な注が付される。これにより詩文註、和哥註はそれぞれ成立の過程に違いはあれど、季吟

により形式の統一、完成させられた彼独自の注釈書であると位置づけることができるのだ。もはや「永済による詩文註に季吟が和哥註を付したもの」とは言えまい。

四　『和漢朗詠集註』刊行の意義

最後に『集註』の刊行意義を、当時の『和漢朗詠集』出版状況と季吟の諸注釈書刊行における位置づけを中心に少しく言及する。

『和漢朗詠集』が早く版本になったのは慶長五年（一六〇〇）耶蘇会板である。その後季吟が『集註』を刊行する寛文十一年までの間に、（書肆・刊記の違いを含めれば）『和漢朗詠集』の刊行テキストは50種を越える諸本を数える。[注6] これは江戸時代初期においても当書がよく読まれていたことを示し、その需要の高さが窺われる。

このような背景に加え、季吟の『集註』刊行以前の日記（寛文元年）には『和漢朗詠集』の講釈を頻繁に行っていることが認められ、また先に挙げた『集註』序文、さらに『續連珠誹諧用意問答』（延宝元年〈一六七三〉識）にも「こゝろざす事ありて先和漢朗詠集を註し、源氏物語の湖月抄をあらはし、枕双紙の春曙抄を書」云々の記述があり、季吟の『和漢朗詠集』に対する熱意が感じられる。

では、『集註』刊行が彼の諸注釈書刊行という一連の仕事の中でいかなる意味をもったか。以下に彼の注釈書のうち刊行されたものを挙げる。

『大和物語抄』　承応二年（一六五三）刊
『土佐日記抄』　寛文元年（一六六一）刊
『歌仙拾穂抄』　寛文三年（一六六三）成立（刊行は正徳四年〈一七一四〉）
『徒然草文段抄』　寛文七年（一六六七）刊
『和漢朗詠集註』　寛文十一年（一六七一）刊
『枕草子春曙抄』　延宝二年（一六七四）跋（以降刊）
『源氏物語湖月抄』　延宝三年（一六七五）刊
『伊勢物語拾穂抄』　延宝八年（一六八〇）刊
『八代集抄』　天和二年（一六八二）刊
『万葉拾穂抄』　貞享三年（一六八六）成立

これを見るに『集註』刊行を境として、それ以前とそれ以後とでは注の付された書の趣が異なることが見てとれる。『集註』以前は『大和物語』、『土佐日記』、『徒然草』といった比較的先行説の少ない古典籍への注釈が目立ち、『集註』以後は伝統的歌学の積み重なった歌書への注釈が付される。『和漢朗詠集』への注釈が、一つのターニングポイントとなった

と考えられないだろうか。

出版文化盛運の最中とはいえ、堂上では出版を嫌っていた時代にあって、季吟が膨大な先達の言を有する歌書に注釈を施し、剰え公行することは容易ではなかった筈である。実際『歌仙拾穂抄』は、和歌に直接関わる書であるためか、寛文三年に成立していながら、出版されるまでは正徳を待たねばならなかった。

『和漢朗詠集』は、先行注釈書を多数有していたにも関わらず、あくまでそれは詩文註のみというのが主流であった。しかしそこに収載される『古今和歌集』、『伊勢物語』などの歌書にも共通する和歌に対する注釈を付して公刊したことはその後、彼が伝統的な歌書の注釈書を刊行する上でおおきな自信（契機）となったと考えられるのである。

『集註』は刊行以後、ロングセラーとなり長らく人口に膾炙した。それは当書の伝本の多さが物語っている。平安末から続く『和漢朗詠集』注釈史において、中世と近世を結び合わせ、初の完全な形の注釈書刊本として世に出だした季吟の功績は大きい。『集註』は、彼が一流の古典学者として踏み出すための記念碑的作品であったといえる。

注

※引用に際して各資料に適宜、傍線・句読点等を付した。

注1　この七系統は、黒田彰氏が分類された。（「室町以前〈朗詠注〉書誌稿」『中世説話の文学史的環境』和泉書院　昭和62年）

注2　伊藤正義 黒田彰 編著『和漢朗詠集古注釈集成』第三巻「解題」（大学堂書店　平成元年）

注3　序文には訓点が付されない。引用に際し付した訓点は、『國學大家北村季吟』（北村季吟顕彰会　昭和52年）による。なお、これより引用する『集註』本文には論者家蔵の版本を用いた。

注4　永済注系諸本については、注2にも示した『和漢朗詠集古注釈集成』「解説」に高田本、京大本、竜谷大学本等が挙げられる。これらは同書中において永青文庫本との対校本としても用いられている。以下の季吟による注釈文操作について、これは季吟が永青文庫本を改変したのではなく、あくまで永済注系を改変したという意味で論じるので注意されたい。『集註』と永済注との比較には永青文庫本を主として用いるが、対校される永済注系諸本ももちろん考慮に入れている。

注5　季吟の手になる伊勢物語注釈書の写本・刊本における当歌の秘説等については、青木賜鶴子氏の御論考がある。（「『伊勢物語拾穂抄』の成立」「女子大文学」国文篇第三十八号　昭和62年）

注6　青裳堂古書目録「和漢朗詠集の版種」（平成18年）参照

本稿は、第六十二回西日本国語国文学会（平成24年9月15日、清武町文化会館）で発表したものに加筆したものである。発表に際し、ご教示下さいました諸先生方に記して感謝申し上げます。

（むらかみ　よしあき・本学大学院博士後期課程、日本学術振興会特別研究員 DC1）